

二〇二六年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第二回）

受験番号

国語

《配点》

一〇〇点

《試験時間》

四〇分

《注意事項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は13ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったら、解答用紙の左にある欄に、氏名と受験番号（算用数字で）を、正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の*印の欄には、何も記入しないで下さい。
- 五 デジタル採点を行いますので、解答は濃くはつきりと書いて下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

□ 次のA～Eの各文中のカタカナを、漢字に改めていねいに書きなさい。

- A 世界の国々とのコウエキで栄えた港湾都市。
- B 先ごろ新しい金のコウミヤクが発見された。
- C ぜひセンモン家の意見も訊いておくべきだ。
- D 昔の繊維産業はヨウサン農家が支えていた。
- E 敗勢を立て直すためのゼンゴサクを講じる。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(問題文中の※は、終わりに注があります。問題文中の〈 〉は、上の語や語句の意味を説明しています。また、問題文の一部を書き改めています。)

【あ】

記憶は過去のものです^①。現在を理解するための手がかりになります。だからこそ、記憶は伝播^{でんぱ}(伝わり広まること)する。ある経験が、それを経験していない者によって使われるのです。

※₁ かんばらさんのエピソード(ちよつとした印象的な話題)は、体のある部分の経験が別の部分によって使われるような伝播でした。しかし伝播はそれだけではありません。ひとつの体を持つ物理的な(物としての)輪郭^{りんかく}を超えて^こ、ある人間から別の人間へと、記憶が伝わるということがある。それは文化の領域(文化に属するいうこと)です。

そもそも、記憶とは必ずしも個人的記憶に限られません。たとえば、原爆^{げんぱく}ドームを見て太平洋戦争に想^{おも}いを馳^はせる^{※2}。実際に戦争を経験している人にとってもそうでない人にとっても、この連想は少なくとも日本人ならばきわめて普遍的な(いつでもどこでも通用するような)ものでしょう。記憶は、複数の人間から成る集団や社会において、伝えられたり、共有されたりするものでもあります。

こうした集団的な記憶の形成に役立つのが、写真や映像、あるいは書かれた文章などです。そうしたメディア(情報を伝えるもの)を通して、記憶を失わずにすんだり、実際に身をもって経験したことのないことでも知ったりすることができま^す。

ただし、必ずしも文字通りの「記憶」だけが記憶に関わることも限りません。文字や絵、映画やマンガなどのフィクション(創造された作品)も、その集団における場所や出来事の捉^{とら}え方^{かた}に大きな影響^{えいきょう}を与えます^{※2}。丸木夫妻の絵画や『はだしのゲン』が、少なくともある世代の原爆の記憶に大きな影響を与えていることは間違いありません。

この章では、小説を読んだり絵画を見たりする過程で、障害のある人の体に何が起こっているのかに注目します。それは、集団的記憶と一人一人の体の関係を読み解くことでもあります。

確かに、小説や絵画は集団的記憶の形成に関わります。でも、その場合の記憶とは、基本的には健常者(心身に病気や障

害のない健康な人)の体を基準としたものです。目が見えない人や、耳の聞こえない人にとっては、必ずしも身体的にリアリティ(よくわかる感じ)のある内容とは限りません。

このことは、言い換えれば、小説を読んだり絵画を見たりする経験が、二つの異なる体が出会う場であるということ②です。ある人が書いた文章を、別の誰かが読む。はるか昔に書かれた文章を読むと、当時の風習(習わし)や考え方に驚くことがありますが、同じことが□□の読書に関しても起こります。a、文章を書いた人の体と、それを読む人の体が大きく違う場合、それらが互いに軋みあったり、あるいは逆に混じり合ったりするのです。それは絵画においても同様です。

異なる体の記憶が、別の、しかも条件の異なる体と出会う。この接触は、違和感(少し違う、よくわからないという感じ)を生み出すこともあれば、逆に体を変えるような学びの機会になることもあります。そうした「自分のものでない記憶との出会い」について、考えてみたいと思います。

【い】

※3なかせえり
中瀬恵里さんは、全盲(全く目が見えないこと)の読書家(読書を趣味や仕事にしている人)です。先天的に(生まれながら)全盲ですから、そもそも「見る」ということがどういふことを経験的には知りません。それゆえ、目が見える人の文章を読んだときに、小さな違和感を感じることがあると言います。

b 小説で、レストランの店内の様子が描写されていたとします。「店の扉をあけると、カウンターのほかにテーブル席が五つあった」。たとえばこんな何気ない描写であったとしても、中瀬さんにとっては、違和感を感じると言います。

それはどんな違和感か。「細かい」と中瀬さんは言います。「本を読むとすぐ情報が細かい。ふだん知らないようなことも書いてあって、『へー、テーブルが五つ』みたいな(笑)」。行きつけのお店でも数えたことないような情報が入ってくるから、細かいな、と思います」。

「細かい」という反応は、中瀬さんが実際にレストランに行くときの経験の記憶と、本で描写されている情報を比較することから生じています。中瀬さんは、行きつけのお店であつてさえ、わざわざ席の数を確認したことはない。ゆえに思い出そ

うとしても思い出すことができない。^③それは意識していない、記憶していない情報です。

【c】、目が見える人が書いた文章には、平然と（当たり前のことのように）席の数が「五つ」と明示してある。自分が意識・記憶していない情報が描いてあるがゆえに、中瀬さんはそれを^④「細かい」と感じているのです。

【う】

注意しなければならないのは、この差異が、単純な情報の「量」には還元（一緒にすること）できないということです。確かに目が見える人の記述は、中瀬さんが意識・記憶していない情報も含まれているという意味で、情報量が多いように思えます。しかし「テーブルが五つ」という情報によって、目が見える人が何を伝えようとしているかを考えれば、そこに「質」の問題も関わっていることが分かります。

目が見える人がレストランの席数を記述するとき、多くの場合それは「レストランの規模（大きさや広さ）」を読者に伝えることが目的でしょう。もちろん、推理小説などでは「五」という数そのものが重要になる場合もありますが、たいていは数は手がかりにすぎません。

「五席」であればかなり小さな、こじんまりしたレストランでしょうし、「一〇〇席」となればファミレスのような、店員さんが端末（注文をとるための機器）を持って注文を取りに来るような機械化された店をイメージ（思い浮かべること）します。席数という情報を手がかりに、目が見える人は、店舗（お店）の空間的な広さやタイプ、料理の価格帯（値段がいくらぐらいか）、想定されるコミュニケーションなどについてのイメージをふくらませます。

では全盲の方がレストランに行くとき、彼らはこうした店の規模に関する情報を得ていないかという点、必ずしもそういうわけではないでしょう。お客さんの会話のトーン（大きさや調子）、BGMや環境音（その場だから発生する音）が反響する具合、^d頬にあたる空気の流れを手がかりに、彼らは瞬時に「規模」を把握しているはずで

中瀬さんも言います。「たとえば初めてのレストランに行ったとしますよね。そうすると、広そうなレストランなのか、こじんまりしたレストランなのかは、なんとなく雰囲気で分かります」。ただ、それを「席数」という数では表現しないだけ

加えて、見える人が席数を描写するのは、レストランに入ったときに、「自分（たち）の席を選ぶ」意識があることも

関係しているでしょう。店のなかで、どこに空席があり、どこが人数にふさわしく、かつどこが最も居心地がよさそうか。つまり目の見える人の多くが、レストランに入った瞬間、「テーブル」に意識を奪われているのです。

だからこそ「席数」の描写があっても不自然には感じない。これに対し、目の見えない人は、特に初めて入るレストランでは、自分で席を決めるのではなく、介助者（付き添って世話をする人）や店員に案内されて席につく、という形になります。つまり、「テーブルの状況を把握しなくちゃ」という習慣がない。こうした意識の違いも、描写の違いの一因であると考えられます。

【え】

このように、目の見えない人と見える人では経験のパターン（決まった型）が違っており、だからこそ、「自然だ」と感じる描写のパターンも違ってきます。そのギャップ（食い違い）が「細かい」というような量的な多少として感じられたとしても、その背後にあるのは、経験の質的な差異（違い）です。

実際、中瀬さんは、^⑧「見える人が行う描写について「落ちている」と感じる情報もあります。中瀬さんの経験の記憶からすれば「あつて当然」の情報が、書き込まれていないのです。

中瀬さんは言います。「本の描写では、椅子が何脚で机が何脚で、ということは書いてあるんですが、材質や座り心地はあんまり書いていない。テーブルも、四角いか丸いかはあんまり書いてない。触覚（触ってわかること）とか匂いとか、そういうものは見える人の書く本からは落ちてきている気がします」。

近代以降（日本では「明治時代」以降）の文学（ここでは小説などを指している）において、描写とは基本的には「視覚的な（目で見てわかる）描写」を意味します。絵画のように、あるいは演劇のように、場面や人の行為を、読者の目の前にありありと見せること。これが描写の役割とされてきました。e、触覚や嗅覚（鼻で嗅いでわかること）の情報は、相対的に（他に比べると）「落ちやすい」。もちろん、「鼻をつく匂いが漂ってきた」のように、描かれることもあるでしょう。しかしそれはあくまで視覚的な描写に対しては補足的な（足りないものを補う）位置にとどまります。

一方、中瀬さんの場合は違う。とらえるのは、触覚や嗅覚の情報によって構成される世界です。「自分の場合は、ベンチに座ったら、お尻がくぼんでいるなとか、ずいぶん柔らかいなとか、どういう座り心地なのかは意識する、というか勝手に

入ってきちゃうんです」。

ちよっと極端きょくたんな言い方をすれば、言葉の定義⑨（定まった意味）そのものが違っている、とでも言えばいいでしょうか。

「椅子」と言われたときにイメージするものが、見える人と見えない人では違っているのです。「あの行きつけのレストランの椅子」と言われたら、見える人であれば、椅子の色や形、素材を思い出すでしょう。

しかし中瀬さんは違います。「椅子の背がカクカクしていたかとか、椅子を引いたときの重さとか、思い出しますね」「あとは手触りてざわ。木って言ってもトゲが刺さりさそうなやつなのか、山小屋みたいな「丸太の」凸凹でこぼこのやつなのか、ニスっぽい（つや出しの塗料とりょうを塗ったような）きれいなやつなのか、そういったことは手触りで覚えていきますね」。

このような触覚的な記憶についての話を聞くと、「そもそも記憶とはどこにあるのか」という※4哲学的・脳科学的な大問題にぶちあたります。

視覚的な記憶を思い出す場合、少なくとも私たちの実感としては、「頭に思い浮かべる」のであって「目で思い出している」わけではありません。一方、触覚は全身に広がっており、「どこで感じたのか」（手のひらなのか、背中なのか、足裏なのか）という位置の情報も、そこには含まれています。となると、記憶に関しても、位置の情報が何らかの形で再生されるのではないか。

中瀬さんも言います。「椅子の触感しゅかん（触った感じ）とかは、座ったときの感覚がよみがえる感じですね」。それはまるで、「背中で思い出している」ような記憶のあり方です。

【お】

何が描写されるかは、何が記憶されるかに直結します。この点に中瀬さんが敏感びんかんなのは、彼女のふだんの仕事も関係しています。

彼女は企業きぎょうの中で、社内広報（社員向けに様々な情報を提供する仕事）の仕事をしています。社員向けのサイト（「場所」を意味する語でインターネット上の情報空間を指す）に記事を書いたり、その翻訳ほんやくの手配をしたりしています。

そうすると、必ずしも彼女にとって自然ではない仕方⑩で、情報を提示する必要が出てくる。つまり、「見える人に見せる」ためのルール（規則や約束事）に従う必要が出てきます。

容易に（かんたんに）想像がつくように、違いが顕著に（はつきりと明らかに）出るのは「写真」の位置づけです。「あるニュースをなるべく早く伝えなくちゃいけない、でも担当の部署から写真が来ない、となったときに、見えない人の感覚だと、とりあえずアップ（インターネット上に情報をあげること）しておいて、写真はあとから追加すればいいよね、となると思います。でも見える人中心の社会なので、写真がないのだったら掲載（けいさい）（記事や文章を載せること）を延期してでも写真を待ったほうがいい、と言われることも多い」。

確かに、さまざまな情報が入り乱れる現代のネット環境（インターネットをめぐる状況）においては、パッと目を引く写真の重要性が、ますます高くなっていると言えます。写真なしで公開しても注目されないという理由で、鮮度（せんど）（新しさ）を犠牲（ぎせい）にしてでも写真が届くのを待つ、という中瀬さんの会社の判断も、見える人の感覚からすると「十分にありえる」ものです。

ただしここで重要なのは、見える人は視覚情報が必要だが、見えない人にとってはそうではない、という表面的な違いではありません。⑩中瀬さんが気になるのは「知る」の構造（成り立ちや仕組み）の違いです。自分が直接経験していないことを知ろうとするとき、見える人と見えない人では、求めるものが違います。何をもって「知った」と思えるのか。それは記憶の伝播のパターンに直結します。

その違いは、「雰囲気共有」と「出来事の追体験（後から同じように体験すること）」という違いではないか、と中瀬さんは言います。中瀬さんは、見える人の場合、雰囲気が分かることをもって、その出来事のことを「知った」と思う傾向があるのではないかと、と言います。「やっぱり、『』じゃないけれど、状況をパッと見て『こういう雰囲気だったんだな』というのを、写真から理解したいというのがあるんでしょね。だからSNS（インターネット上で人々をつながるための仕組み）でも写真を載せると『いいね』がいつぱいいたりするんだと思うんですが」。

それに対して、見えない人の場合には、時間的に順を追って、できごとの流れをフォロー（追うこと）したいと言います。「見えない人の場合は、記事を読んだときに、プログラム（そこで進行していること）を追体験しているみたいな感覚が欲しいのかなと思います。『あ、こういうことがあって、こういうことがあって、こういうことがあったんだ』みたいなのが分かることに価値があると思うというか。見える人でもそういう面はあるんでしょうが、文章に書いてあるじゃん、というふうにはならない」。

ひとことで言うなら、見える人は瞬時に、全体を把握（理解すること）したい。文章もまず「全体をざっと読む」とい

うことをしたい。その分、細部の正確さは後回しになりがちです。一方、見えない人は、ひとつひとつ、細部をつみあげる
ことによって把握したい。時間はかかるけれど、その分正確な知り方です。

《中略》

このように読書は、ときとして、書き手と読み手のあいだの体の違いを、明瞭に（へはつきりと）あぶりだす機会に
なります。それは小さな違和感を生み出しますが、中瀬さんにとってこの違和感は、「自分に合っていない」という嫌
悪（嫌がること）につながるというよりは、見える人の世界と自分の世界の違いを発見し、探求するきっかけになっ
ています。

（伊藤 亜紗 著『記憶する体』より）

※1 かんばらさんのエピソード…… 問題文の前に書かれている、難病により下半身が利かず車椅子で生活するパラ
リンピックの閉会式にも出演したダンサーかんばらけんたさんの、脚を実感として感じることでできないために「脚
に意識を置いておく」という生活態度のエピソードを指している。

※2 丸木夫妻の絵画や『はだしのゲン』…… 丸木位里・俊夫妻の『原爆の凶』や、中沢啓治の漫画『はだしのゲン』
を指す。いずれも原爆投下によって引き起こされた人々の苦しみを描いて知られている作品。

※3 中瀬恵里さん…… この文章は電機メーカーの社員として社内広報を担当する、先天的な全盲の中瀬さんに対する
筆者のインタビュー「相手に直接質問して情報を得ること」に基づいている。

※4 哲学的・脳科学的な大問題…… ここでは、そもそも人間の「記憶」とはどのようなものか、また人間の「記憶」
をつかさどっている器官（身体の部分）はいずれかということを言っている。

問一 「あ」も「お」には、それぞれに続く文章の内容を短い言葉で表した「見出し」が入ります。それぞれに入れるのに最も適当なものを、次のア～コの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶は過去のもの
- イ 経験のパターン
- ウ 写真の重要度
- エ 集団的記憶
- オ 「席数五」のレストラン
- カ 背中で思い出す記憶
- キ 全盲の読書家
- ク 「一〇〇席」のファミレス
- ケ 雰囲気か追体験か
- コ 文学的な「描写」

問二 a e に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～コの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|------|---|------|---|------|
| ア | あるいは | イ | そして | ウ | そこで | エ | それゆえ | オ | たとえば |
| カ | つまり | キ | では | ク | ところが | ケ | なぜなら | コ | もつとも |

問三 ~~~~~ I・IIの語句のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ後のア〜エの中から一つずつ選び、記号

で答えなさい。

I 想おもいを馳はせる

II 行きつけのお店

- ア そこに行く気持ちになる
- イ それについて考えてみる
- ウ 強い思いがこみ上げる
- エ はげしい怒りを覚える
- ア いちばん好きなお店
- イ とても美味しいお店
- ウ 何度も通っているお店
- エ 初めて行ってみたお店

問四 _____ ①「現在を理解する」とありますが、これについての説明として最も適当なものを、次のア〜エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある人の過去の経験を、ほかの人が現在を生きるために利用すること。
- イ 過去の記憶が伝わり広まることによって、未来の姿が見えてくること。
- ウ 現在何が起きているのかわからない時に、経験豊かな人に訊きくこと。
- エ 特定の過去の記憶が、ある集団や社会の中で伝えられ共有されること。

問五 _____ ②「二つの異なる体」とありますが、その一方に当たる語を問題文中の□□□に入るものとして、漢字三

字で答えなさい。ただし、その語と対になる語が _____ ②より前の問題文中にあります。

問六 _____ ③「それは意識していない、記憶していない情報です」とありますが、「それ」とは何を指していますか。

最も適当な語句を、問題文中より抜き出して答えなさい。

問七 ———— ④ 『細かい』と感じている」とありますが、なぜ「細かい」と感じているのでしょうか。これについての説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア これまでに見るといふ経験をすることができないため、目が見える人の描写を理解できないから。
- イ 目の見えない人が知りたくても知ることができない情報を、目が見える人が持っているから。
- ウ 目の見えない人が認知したことがない情報が、目が見える人の描写にはふくまれているから。
- エ 目の見えない人は物事を全体で把握はあくするため、目が見える人の部分的な情報は必要ないから。

問八 ———— ⑤ 「この差異が、単純な情報の『量』には還元できない」とありますが、これについての説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目が見える人はレストランのテーブルの席数を記憶に残し、目が見えない人はそれを認知しないという差異は、身体的な条件が異なるため、情報の「量」の問題として扱うのは不適当だ、ということ。
- イ 目が見える人はレストランのテーブルの席数を記憶に残し、目が見えない人はそれを認知しないという差異は、単なる個人の特性の問題であるため、情報の「量」の問題として扱うのは誤りだ、ということ。
- ウ 目が見える人はレストランのテーブルの席数を記憶に残し、目が見えない人はそれを認知しないという差異は、情報の「量」の問題というより、どのようにそれを認知するのかという技術的な問題だ、ということ。
- エ 目が見える人はレストランのテーブルの席数を記憶に残し、目が見えない人はそれを認知しないという差異は、情報の「量」の問題というより、情報を発信する人が何を伝えようとしているかの問題である、ということ。

問九 ———— ⑥ 「目が見える人が何を伝えようとしているか」とありますが、「目が見える人」はどのようなことを伝えようとしているのですか。最も適当な部分を、問題文中より過不足なく抜き出して答えなさい。

問十 ——— ⑦ 「こうした意識」とありますが、これはどのようなものですか。最も適当な部分を、問題文中より十五字ちようどで抜き出して答えなさい。

問十一 ——— ⑧ 「見える人が行う描写について『落ちている』と感ずる情報もある」とありますが、「目の見えない人」にとって「落ちている」と感ずる情報はどのようなものですか。問題文中より過不足なく抜き出して答えなさい。

問十二 ——— ⑨ 「言葉の定義そのものが違っている」とありますが、そのことを伝えるのに、ここで具体的な例として挙げられているものを、問題文中より過不足なく抜き出して答えなさい。

問十三 ——— ⑩ 「彼女にとって自然ではない仕方」とありますが、彼女にとって「自然ではない」と言えるものを、

次のア～オの中からすべて選り、記号で答えなさい。

- ア レストランの音や空気が感ずられる雰囲気。
- イ レストランの席の数が五つであるという情報。
- ウ レストランの椅子いすに腰こしを下ろしたときの感かん触しよく。
- エ 社員向けサイトに載のせる写真を優先すること。
- オ 社員向けサイトの記事の翻ほん訳やくを手配すること。

問十四 ———— ⑩「中瀬さんが気になるのは 、「知る」の構造の違いです」とありますが、

(A) に入れるのに最も適当な語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かえって イ きつと ウ むしろ エ もちろん

(B) ここで言っている『知る』の構造の違い』について、五十字以上七十字以内で説明しなさい。

問十五 に入る語句として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一を聞いて十を知る イ 百聞は一見に如かず ウ 仏の顔も三度 エ 論より証^{しょうこ}拠

問十六 ———— 「自分のものでない記憶との出会い」とありますが、これをタイトル(題名)として自らの経験を題材に、自由に作文してください。作文は、問題文の内容を踏^ふまえたもの、または、問題文の内容とはあまり関係のないもの、いずれでもかまいません。評価は、表記もふくめた言葉としての正しさ、巧^たみさにも着目しながら、文章として完結しているもののみを対象に、その内容を中心に行います。

問十七 で囲まれた問題文の最後の部分を読み、あなたが「違和感」を感じた「読書」の経験について、自由に作文してください。もしなければ、「読書」以外の経験についてでもかまいません。できるだけ具体的に書いてください。評価は、表記もふくめた言葉としての正しさ、巧^たみさにも着目しながら、文章として完結しているもののみを対象に、その内容を中心に行います。

☐
*
A
B
C
D
E

☐																		
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
問十七	問十六	問十五	問十四		問十三	問十二	問十一	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
			B		A									I		a	あ	
															II		b	い
																	c	う
																	d	え
																	e	お

氏名

受験番号

得点
*

